

聖書:ルカの福音書20章27~47節

説教:生きている者の神

はじめに

皆さんこれを読んでどこまで理解できたでしょうか。なにか復活のことを扱っていることは分かるとしても、少なくとも二つの疑問にぶつかります。一つは天国では結婚という制度がないらしい、それは本当か。二つ目は44節です。「どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」この意味がよくわからない。いったいイエスなにを何を語ろうとしていたのか、ともに見てまいります。

1 サドカイ人たちの質問

1) もし復活があるならばこんな矛盾が起きる

28節を読みます。「先生、モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が妻を迎えて死に、子がいなかった場合、その弟が兄嫁を妻にして、兄のために子孫を起さなければならぬ。』」これは申命記25章5, 6節にあるみことばで、このように聖書のことばを出してくることもからもわかるように、サドカイ派は聖書のある部分は信じるけれど、復活のことは信じない、まさに合理的な態度で聖書を読んでいて現代人とよく似ている。そんな彼らがこんなことを言う。七人の兄弟がいて長男が子どもがいないまま死んでしまった。そこでモーセの律法にしたがって次男が兄の嫁と結婚したけれどやっぱり子どもがなかった。同じように三男と続いて結局七人全員が死んでしまった。それで復活したら、この嫁は七人全員の妻になるのか。もしそうならとんでもないことだ。だから復活なんかあるはずがない。そう言いたいのです。

2) イエスの答え

イエスはこう答えられます。34, 35節「この世の子らは、めとったり嫁いだりするが、次の世に入るのにふさわしく、死んだ者の中から復活するのにふさわしいと認められた人たちは、めとることも嫁ぐこともありません。彼らが死ぬことは、もうあり得ないからです。彼らは御使いのようであり、復活の子として神の子なのです。」

天国に行ったらいまの旦那と一緒にいるのか。ときどき話題になりますが、「絶対に嫌だ」と思ってる方にはこれは朗報かもしれません。一方、天国でも一緒にいたいと思ってる方にとってはショックでしょう。いったいどういうことなの

か、実は聖書にはこれ以上のことは書かれていないので私も答えられません。天国に行ってから神さまに尋ねてください。

とにかくサドカイ派の人たちは地上と天国とで結婚制度がまったく同じであるという前提に立って議論を進め、その結果矛盾だと言ったわけです。それに対してイエスは、そもそもあなたがたの前提が間違っていますと指摘します。

3) モーセ：「アブラハムの神」

そうしてから聖書が復活についてなんと言っているか確認していく。イエスが取り上げたのは出エジプト記3章6節の場面です。モーセが荒野で羊を飼っていた時に燃えている柴を見つけて近寄っていくと、主が突然モーセに語りかけてきた。「わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」

アブラハムはすでに死んでいるのですから、これは過去のことを言っているのだらうと解釈してしまいます。けれどもそうではない。これは過去のことではなくアブラハムはずっと生きている。つまりアブラハムは復活するという前提で主が語っている。イエスはそのように聖書を解き明かしてください、これを聞いたサドカイ人は何も言えなくなってしまう。

2 イエスの解き明かし

1) ダビデ：「キリストは主です」

そこへたたみかけるようにイエスは今度はダビデのことを取り上げる。42から44節。「ダビデ自身が詩篇の中で、こう言っています。『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵を あなたの足台とするまで。』」ですから、ダビデがキリストを主と呼んでいるのです。それなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」

これがきょうの二つ目の疑問です。牧師の話は難しいとよく言われ、その多くは私の力不足のせいですが、言い訳をするなら聖書のことばがそもそも難しいという面がある。それでもできるだけ皆さんが理解できるようがんばってみたいと思います。ここから三つのステップを踏みながら謎解きをしていきます。

2) 詩篇110篇1節の二つの「主」について

最初のステップ。イエスが「詩篇の中で」と言っているのは110篇1節のことです。そこに戻ってみましょう。「主はわたしの主に言われた。」ルカの福音書とまったく同じに見えますが、よく見ると一箇所違うところがある。皆さんの聖書で、最初の「主」が太くなっているのがわかるはずです。太字で書いてある「主」、これはモーセが神に対して「ああなたの名前を教えてください」と尋ねた時に、神がモーセに教えてくれた神の名前です。

「ヤハウエ」と発音する方もおります。ところがユダヤ人は、主の御名をみだりに唱えてはならないという律法を守り、この文字を読む時発音しなかった。その結果、だれもどう読むのかいまは分からなくなってしまうそうなのです。それくらい特別なことば。それに対して二番目に出てくる「主」、これは普通のことばで「私の主人」という意味。ということで違いが分かるように訳し直せば、「父なる神は、私の主に言われた。」二つの主は同じ方を指すのではなく、最初の「主」は父なる神、二番目の「主」は子なるキリストを指す。これで、ダビデがキリストを主と呼んだ。そういう意味です。ここまでの謎解きの最初のステップです。

3) ダビデ契約 (サムエル記第二 7章12, 13節)

続いて謎解きの二つ目のステップに移ります。残る問題は44節の後半です。「それなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」

これを理解するために、ダビデがイスラエルの王となってまだ間もない頃に戻ります。混乱していたイスラエルがじょじょに落ち着いていった頃、ダビデは主の宮を造るべきではないかと思に至ります。それに対して主がお語りになったことばがサムエル記第二7章12, 13節。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国を確立させる。」後にこれはダビデ契約と呼ばれるようになり、このことばから救い主はダビデの子孫からお生まれになると人々が信じていく。「キリストがダビデの子」という話しはここから来ていて、イスラエルの人ならだれも信じている事柄でした。これが謎解きの二つ目のステップです。

4) ダビデは (まだ生まれていないはずのキリストを) 主と呼んだ

続いて三つ目のステップです。44節全体を読みます。「ですから、ダビデがキリストを主と呼んでいるのです。それなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」

おさらいをします。最初のステップで、ダビデがキリストを主と呼んでいたことを見ました。二つ目のステップでは、救い主キリストはダビデの子孫として来られることを見ました。この二つのことをつなげてみてください。矛盾に気がつきませんか。ダビデが生きていた時はまだ救い主が来ていません。救い主はダビデの子孫として来られる。未来のことだからです。ところがダビデは詩篇で、救い主のことをいま生きておられるかのように「私の主」と呼んだ。まだ生まれていないし、見てもいない救い主を、今生きておられるかのように「私の主に言った」と書いた。常識的に考えたら辻褄が合わない。それこそ夢でも見たのか。もちろんそんなはずはない。解決方法の一つ。救い主キリストは永遠に生きておられる。そういう前提で読み直せば、全部辻褄が合って矛盾点はなくなります。

ここで結論が出ました。44節の問いかけ。これは、キリストが永遠のいのちを持っておられることを教えている。

3 主が語ろうとしていたこと

1) 人はよみがえる

ここで話しが終わってもいいはずなのに、聖書は実に奥深い。46, 47節に続いていく。とってつけたのではありません。今日の箇所は全体で一つのメッセージなっています。最後にそのことに触れていきます。

今日の箇所の流れをおさらいします。まずサドカイ人たちが登場してきました。そこでわかったことは、アブラハム、イサク、ヤコブは死んだのではなくやがて復活するということでした。「復活するにふさわしいと認められた人たち」という条件はありますが、人はよみがえる。この約束がはっきり示された。

2) ならば神がよみがえるのは当然

続いてイエスはダビデが書いた詩篇を取り上げ、救い主キリストは永遠に生きておられるということを示してくださいました。神は永遠であって死ぬことはない。それを聞いて私たちは「そんなことは当たり前でしょう」と思う。でもイエスが伝えたいことはその先にあります。

3) しかしその前に主は殺されなければならない

イエスは46, 47節で律法学者たちに用心するよう弟子たちに警告していて、なにか唐突という印象もあります。後からとってつけたのではありません。44節までだけなら、キリストは永遠に生きる方という話しで完結します。そこにはご自身が死ぬことは一切出てこない。けれどもこの方は十字架で死なれます。そのために私たちのところに来られました。イエスは私たちの罪の身代わりとなるために死ななければなりません。そのことを抜きにして私たちの救いはありません。イエスのご自分が十字架に向かうようにとわざわざルールを敷く方なのです。

どうしてそんなにご自分の死にこだわるのか。私たちのことを見てみましょう。私たちは救いを信じて復活のいのちをいただいています。だからと言ってもう死なないのではありません。私たちの古いからだはいつかは滅びて死を迎えます。ある方は言うかもしれない。「永遠のいのちを与えますと言いながら結局死んでしまうのだったら、約束なんて信じられない。」もし私たちだけが死ぬのならそうだったのかもしれない。ところが、神であり救い主であるキリストも死んでくださった。神は死という道を通られ、三日目によみがえられました。永遠のいのちを与えてくださる方がそうして下さったのですから、私たちは「救いの約束は嘘だった」など言うことはもはやできません。次の世では私たちはもう死ぬことはない。そういういのちをいただいている。その恵みを思い起こしながらイエスが通られた道を歩んでまいります。